

# 助産師基礎教育修了段階における助産実践基礎力の質保証と入職に向けた心理的準備性を高めるためのプログラムの試行

Prepare for becoming registered professional midwives after obtaining basic midwifery education.

中本 朋子<sup>\*1</sup>                      山下満枝<sup>\*2</sup>  
Tomoko Nakamoto              Mitue Yamasita

## 要旨

本報告は、助産基礎教育を修了した段階での助産実践基礎力の質保証と入職に向けた心理的準備性を高めるための教科外プログラムの試行結果である。

平成21年7月保健師助産師看護師法及び看護師等の人材確保の促進に関する法律の改正により、「新たに業務に従事する看護職員」の臨床研修等が平成22年4月から努力義務化された。助産師を対象とした新人教育の内容は、「新人看護職員研修ガイドライン」<sup>1)</sup>「新卒助産師研修ガイド」<sup>2)</sup>などに示され、新人教育の体制が整備されつつある。しかし、現状は、助産師の場合、1施設に就職する人数が少なく、入職先の規模や職場環境によって現任教育は多様である。

そこで、新人助産師を送り出す教育機関の役割として、助産基礎教育修了時点の助産実践基礎力の質保証と、入職に向けた心理的準備性を高めるための教科外プログラム（以下プログラム）を試行した。

本学別科助産専攻開設時から3年間の実施結果より、入職前教育の有用性とプログラム作成に関する示唆を得た。また、1年間の教育課程において、年度を超えた卒業生と在校生の交流による「学び合い」の効果が明らかになった。在校生が入職を目前にした時期に、先に入職し自己研鑽を続けている先輩を身近に知ること、在校生自身の自己研鑽への動機付けとなり、入職に向けた心理的準備性を高める効果があったので報告する。

## I 序論

平成24年度、山口県立大学別科助産専攻は定員10名で開設された。アドミッションポリシーには、「助産師免許取得後は山口県における母子保健医療現場に従事する意思を持つ者」と明記され、修了生の約7割が県内に就職している。就職先の医療機関1施設当たりの助産師の採用人数は少数であり、助産師に特化した新人教育は多様である。そこで、新人助産師を送り出す教育機関の役割として、助産基礎教育修了時点での助産実践基礎力の質保証と入職に向けた心理的準備性を高めるための教科外プログラムを模索しながら3年間試行した。

実践力では、入職時には実習終了時点から約5カ月間のブランクがあるため、演習によって分娩介助

技術を中心とした助産基礎技術を行い、既習事項の復習を行った。また、基礎看護技術は、モデル教材を用いて演習した。心理的準備性を高めるためのプログラムでは、前年度、前々年度（入職1,2年目）の卒業生を招き、職場に慣れるまでの過程を語ってもらった。別科の学生は、入学時の年齢が20代～40代であり、看護師としての就労経験の有無、就労期間も多様であるため、プログラムへの参加は全て学生の自由意思とした。学生の反応、アンケート調査より、参加した全員の学生より「役立った」「今後もプログラムを継続した方が良い」という評価を得た。また、在校生と卒業生との交流を通し、卒業生、在校生相互の教育力が示唆された。

※1 山口県立大学別科助産専攻准教授

※2 前山口県立大学別科助産専攻別科長

## Ⅱ 目的

助産基礎教育修了段階での助産実践基礎力の質保証と入職に向けた心理的準備性を高めるためのプログラムを作成する。

## Ⅲ 方法

### 1. 作成方法

プログラム試案を1年ごとに計画、実施、チェック、改善のサイクルで3年間実施し、プログラムを作成する。

2. 対象者：助産師基礎教育課程（1年課程）である本学別科助産専攻在学学生

3. プログラム実施時期：助産師国家試験終了後、2月中旬～下旬の1週間

### 4. プログラム内容

1) 看護・助産実践力に関する演習内容

①助産技術演習（分娩介助技術 出生直後の新生児のケア 計測技術）

②基礎看護技術演習（採血、留置針の取り扱い、輸液ポンプの取り扱い、導尿、浣腸）（2年目より追加実施）

①②とも演習室で個人及び複数人で自由に技術練習ができるように、各技術ごとに演習用のブースを準備した。教員は見守り体制で、指導を希望する場合に備え待機した。

2) 職場適応を促進するための計画（2年目より実施）

入職後の助産業務の実施と助産実践能力修得のための計画が自分でイメージできるように1～2年上の卒業生を招き『ちょっと先行く先輩との交流会』を開催した。卒業生には、教員から仕事に慣れるための取り組み、日々の振り返りの仕方などを語ってほしいと依頼した。交流会では在学学生と卒業生のみ

で交流し、教員は同室内で見守りの立場をとった。

### 3) 評価方法

1年目の評価：演習終了後および入職3～4カ月後頃の面会時に近況とともに入職前の演習が何か役立ったかを聞いた。

2年目の評価：入職後9カ月目の新人助産師が参加する研修会終了後、交流会を行い、①演習が役立ったか、②どんなプログラムが必要かをアンケートした。

3年目の評価：演習の取り組みに参加し、学生の様子を観察した。

4) 予算：交流会経費、卒業生への謝礼等は、山口県立大学研究創作活動（区分：教育方法改善型）の助成金より支出した。

### 5. 倫理的配慮

本学別科助産専攻の学生全員、卒業生に対して、プログラムの目的、内容を口頭で説明し、プログラムへの参加は自由であること、学業成績に関係しないこと、参加しなくても不利益を被らないこと、途中辞退は可能であることを説明し同意を得た。アンケートは無記名とし、提出をもって参加への同意とした。

## Ⅲ 結果

### 1. 参加状況

本学別科助産専攻の入学時レディネスは、看護基礎教育が、「高等学校5年一貫看護師養成課程」「看護師学校」「大学」であり、看護師としての臨床経験が全くない学生、豊富な経験がある学生、産業保健師の経験がある学生、看護管理職であった学生と背景は多様である。そのため、各個人が自己の課題に照らして参加できるようにプログラムへの参加は全くの自由とした。各年とも半数以上の学生が参加した（表1）。

表1. 入職前プログラム年度別参加状況

年度	学生数	内容	実施日	場所	参加人数	
					在学学生	卒業生
24 1期生	10名	入職前助産実践力 演習	2月下旬空き時間	助産演習室	5名	
25 2期生	10名	入職前助産実践力 演習	2月18・20・21日	助産演習室	7名	
		入職前 ちょっと先行く先輩と交流会	2月22日	大学内地域交流 スペース	5名	6名
26 3期生	10名	入職前助産実践力 演習	2月23・26・27日	助産演習室	8名	
		入職前 ちょっと先行く先輩と交流会	2月21日	教員研究室	4名	1名*

※本学研修会に参加した卒業生と交流した。

## 2. 実施・結果・評価

### 1) 1年目の実施・結果・評価

1年目は、入職が実習終了時点から約5カ月後であることから、実習で修得した助産技術の感覚を取り戻す目的で、国家試験終了後、空き時間に助産技術演習を実施した。

5名の学生が主に分娩介助技術の演習を行った。学生は、主体的に実習で修得した助産技術・ケアをテキストの記載と照合しながら確かめていた。教員は、質問や演示の希望に応じた。

実施後の感想は、5名全員が「感覚を思い出した」「実習を終え6カ月近く開いていたので雰囲気を出すのに役立った」であったが、卒後の面会時では、演習が役立ったかの問いに「臨床では、新生児、褥婦の看護だからまだ分娩業務についていないのでよくわからない」「学生一人一人の課題が違うので演習内容をセレクトできる形が良い」の返答があった。

### 2) 2年目の実施・結果・評価

1年目の実施結果を踏まえ、助産技術の演習に加え、基礎看護技術の演習を行った。基礎看護技術においては、本学看護学科教員の協力を得、教材、看護手順に関する資料を準備した。また、前年度より心理的準備性を高めるという目標を明確にし、入職後の生活をイメージできるように「先輩との交流会」を企画し実施した。プログラムに対する評価は、演習中の取り組みの様子を参加観察するとともに、入職後9カ月時点でアンケートを実施した(表2)。

助産技術演習へは、1日4名～7名の参加があり、3日間で延べ19名が参加した。卒業生との交流会には5名が参加し、前年度の卒業生6名と交流した。

卒業生へは事前に教員から「職場に慣れるまでの経過を紹介してほしい」と依頼した。卒業生も自由意思による参加とした。卒業生は、自主的に作成した「マイ業務ノート」「振り返りノート」を持参し、実物をもとに日々の取り組みを紹介した。混合病棟に入職した卒業生は、「看護師の仕事があつての助産業務なので今は看護業務1つ1つができるよう努力している」と言い、他の卒業生は、「先輩の助言は、『私のために言ってもらっている』と受け止めることが大切」、「困ったことは、独り言でもいいから声に出そうと思った」、「『今年の新人さんは…』と言われても自分から関わりを持とうとした」、「異常の場合の対応は、何度もシミュレーションした」など環境に適応するまでの経過をリアルに語った。

卒後9カ月の時点のアンケート結果では、回答者全員が役立った、入職前プログラムは必要と回答していた。どのような演習プログラムがあつたらよいかは、新生児受けの演習6名中6名、分娩介助技術が6名中5名であった。

### 3) 3年目の実施・結果・評価

1年目、2年目の評価を踏まえ、2年目と同様の演習プログラムを実施した。卒業生との交流では、卒後2年目の卒業生が、入職後自主的に記録を続けている「振り返りノート」を持参し在学生在に紹介した。10年以上の臨床経験のある在生も参加し、クラスメートに「新人の時は、誰かひとりでいいから自分のことをわかってもらえる先輩がいると心の支えになる」と伝えており、活発な交流があつた。

## Ⅳ 考察

別科開設後1期生から3期生まで、プログラムを

表2. アンケート結果(入職9カ月時点)

n=6

問1	入職前に助産技術演習、基礎看護技術演習をおこなったことは役立ちましたか。
	①はい(6名) ②いいえ(0名)
問2	助産師国家試験受験後の入職準備プログラムは必要だと思いますか。
	①思う(6名) ②思わない(0名)
問3	どのようなプログラムがあつたら良いと思いますか。(複数回答)
	①新生児受け 6名
	②分娩介助技術 5名
	③妊産褥婦新生児の経過診断 知識整理 4名
	④先輩との交流会 3名
	⑤実習記録の振り返り学習 1名
	⑥基礎看護技術 1名



修正しながら継続した結果を考察した。

### 1. 自己の課題に気づき、目標を掲げ取り組むプロセスを支援する

初年度は、実習で学んだ助産技術の臨床の感覚を取り戻す目的で、一律に「分娩介助演習」を計画した。しかし、卒業生は入職後1年近く分娩介助に携わらない場合があった。入職後の職場配置も分からない段階で、教員が既習事項の定着を目指し「分娩介助演習」のセッティングをしても、新たに入職先の手順を覚える現状がある。このことから、入職前の演習は、「手順ができる」を目標としても意味をなさないと考える。

しかし、アンケート結果では、卒業生は、「役立った」回答しており、このことは、学生自身が入職前の自己の課題に気づき、目標を設定し、主体的に演習に取り組んだというプロセスこそが「役立った」のだと考える。教育機関の役割は、1つ1つの技術ができる、できないに終始するのではなく、「学生自身が自己の課題を明らかにし、目標を掲げて取り組むプロセス」を支援することが重要となる。そのプロセスを辿った体験が、入職に向けた準備となり、「1つ1つやればできる」という自己効力感が、入職後のさまざまな課題に対処する時の基礎力になると考える。

別科助産専攻は、学生の背景が多様であることから、入学時から学生の個別性に応じた教育支援が必要である。1年間の助産師基礎教育課程を修了する時も学生個々の課題は多様である。教員が一律にプログラムを提示するのではなく、入職前には、学生自身が自己に向き合い、自己の課題に気づき、目標を持って取り組むプロセスを体験している必要がある。

### 2. プログラムへの参加は学生の主体性に任せる

実習を終えた段階での学生主体の演習は、実習前とは違う効果が見られた。教員が関与しなくても助産基礎技術の確認とともに、実習で修得したケアリングの姿勢や、常に変化する対象をアセスメントしながら実践するという思考と技術を常に連動させる助産技術の体験を共有しあっていた。

国家試験終了後、入職までの約1カ月間は、就職後は得難い最後のまとまった自由時間である。海外旅行を計画する学生もある。自分のためにこの自由時間をどのようにデザインするかを選択し、考え、実行することは、自己教育力に繋がると考える。し

まい込んだユニフォームを取り出し、主体的に演習を始めた学生は、最初は、1～2名と少数であったが、この主体的な学生の取り組みは、クラス全体を巻き込むという影響力が見られた。良い意味での同調が起きると考える。

### 3. 卒業生、在校生相互の「学び合い」を活用する

入職を目前にした時期の交流会の効果として、在校生は、身近な先輩が日々発生する課題に取り組むつつある現実を知ることができた。具体的に「マイ業務ノート」や「振り返りノート」の実物を見せてもらうことで、「こうやって乗り越えていく」がイメージできていた。また、入職して専門職業人を目指すために必要な自己研鑽の意味を理解し、「専門職業人を目指してスタートしよう」という心理的準備性を高めていた。努力すればできそうなモデルをイメージすることは、入職に向けた心理的準備性を高めると考える。

さらに、夜勤に対応するための生活の整え方など、ちょっとした私生活の智恵も年度を超えて、先輩の体験が次の年度に引き継がれる効果がある。そして、看護師経験がある在校生からは、プリセプターとの関係の持ち方などのアドバイスもあり、社会人力を考える機会にもなる。卒業生、在校生の交流会は、個々の多様な背景が「強み」となり、相互の「学び合い」の効果がある。

### まとめ

多様な背景の学生を受け入れる別科における入職前プログラムにおいて次の示唆を得た。

1. 学生自身が、主体的に自己の課題に気づき、目標を掲げ取り組むプロセスを支援する。
2. 学生の学習欲求に応じることができる学習環境を準備する。
3. 卒業生、在校生相互の教育力・影響力を活用し、学生の背景が多様であることを「強み」とする「学び合い」の場を企画、調整する。

### 文献

- 1) 厚生労働省：新人看護職員研修ガイドライン, 2011.
- 2) 日本看護協会：新卒助産師研修ガイド, 2012.